無言抄　中

和書門 類
二五八七二號
一〇六函
二架
三冊

内閣文庫
和書 類
二五八七二號
三冊
二〇二函
一一架

内閣文庫
番號 和 25872
冊數 3（2）
函號 202 250

国立公文書館
National Archives of Japan

世言抄巻中

一社や　よこやけこなたへ深く仏事不当と云
義也る付たるを不可法也の通り

一八幡　名宗する古跡ありあり丁

一山掛れえや　山数ありあるを

一山乃端　あり物とわを嶮すり峯嶽る拓尾
上ホも山のとり又句さるふすり

一山のつら　暁の雲乃事也夜分なり峰桐也

一山とりよ　字をれまおとの風うなる文字
も類あり同両中もくくしりうを徒催く

浅草文庫

一山路やまかひ山ふところは体可隔句物也
一山のは　山下露なとハ二句嫌山陰にも下草
なと嫌し体隠ハ下摘によりて不嫌と云
るも天下をさかれなとの類ハ不嫌之
ふゐしかたの所にも嫌之
一山さくら山も也なとは夕けふとし京ハ
字すりこまても二句嫌なり
一山さし　なとにはそいうれ乃ゆ事も不嫌
一山姫　人倫にあらす雑なり
一山かけ　かりて又山姫のきりなきとく打
う色てあるへし体隠く

一山深みなとしぬ　なといひても嫌ふ不二句
嫌也体用也又鳥の羽の外ハ体隠く
一山いまたはく　地藤物いきれしるくすこの
こしゆうそのう色そのなとなくての
字の字とけのはある
一山の色雪乃类なとは体用二句嫌なり体
句よりかへしとそ雪霧乃色なとそ雲山ふ
しそふとも棲物ゆ不嫌雲山乃いろ作く
折なれそ定てあるを雲山りしをふとも
わかなりう色をれり二句なり
やすのいろなとは御気色を嫌のふく逝来

京すゝとひえはしのやう乃うすを席の
好士ふ可住もこれ色られ倒れやすしねやう
ほくやすしまる也善すり打もて定嫌ひくよ
うろん免
一 山乃錢によ乗たりときらふ也し
一 山紫としてさう人このなかりたくし句
はよ取ハうちやいの色也
一 山墨とう句すり紫れ戸志もの席乃数同
ふやう遣ふ付へうし
一 山よりやまし家やいふ詞付句も不苦
一 やすいふ一座二句一ゝへし

一 やすらふ山八字不嫌つき句も不苦
一 八重や趣数ふとの座へ百韻ふ一や幾重
なとゝいひて重乃字計の句を両句と嫌也
一 物ぐ一声柳一秋冬乃句ニ一是新式之
詞やゝなき萩秋すり声やさ哉なとして
も句篇友なり
一 薮たりそひくきとも二 句嫌也
如山の柳としひ色も一座ニ一すり
一 着たく一指ふ一やらるゝの名によりて鳥
乃やらる春乃やゝまふとの句よ又可也
一 やゝま。よやまれて嫌鳥薮ふ乃やよるも

こゝろあはれし
一 金にかせやなとハ数おりと嫌へしやの
字口こゝろまてあるへき事也
一 あし引の金 なとハれや小馬や酉と嫌ふ事
一 矢 ふとしの矢なりときらふまし
一 園にくるき同し酉ときらし嫌へし
一 弥生 きり月次の月二句きらふなり
一 金かひ といふより夜らうしなとの句
られ人付侍るを 此奥や続く
一 やらひ山 雨わらす
一 うくうひのや 二句嫌なりうくうひのや

一 ことにふらとしてはと嫌らす 但可依句体也
一 やまし なりあひをきらふや
ま
一 松に日二句嫌やたくし 依句新式に
一 二句嫌とき嫌せは慶つまく不若老然
不春やもうもへくしぬ松の葉の色とらゝ句に子曰
せし蟹送と人なみ放たるやもて京献済きられ
けるの也うのるを似うこあひくをも此奥
よりそのなけ猶なる鳥の子星乃みなすてを
元廻らん思ふりうし不結二句きらひ
てしつる趣し

一　松の門・挿櫛ありかけず杉木までつゞく
ろ門なりとも松垣なとも同前
一　松風　二句去　松に風むすびとひくてもつりはなれ
とあるもし夏風秋の色山風嵐の色なと
風に妻恋風の不可記又音風なとの為
なる耳にふるこそのとたく一句なり依嫌
一　松のせの面　木の葉の面に音は面にうつれ
と或本に可嫌先動式之詞なり混合する物
と或本ハりきらふとしたる人とは松のせハ
かわる面に似ゝるとふ心のとありみ松の
せ世のまちかんの面はかわるんにもあるへし

志つ迄とも混合するとハ花の名をおハ
はなしハ下にても志るを二句又句嫌あ
らく分別あるへし
一　異風の所面　名の事ともつゆ色に隔物に
二句可嫌我に異風の面とも大方に隔物に
わりさま迄も隔とあらくうらあしり如此
一　世の無色志つ迄とも二句又句は嫌面ハ之ハ
席は好士にまかせ句によるへき也
一　松の雪　同竹草木ニの面嫌にトト筆櫛可嫌
おほ越混合白雪冬の心なりなふまゝし如常
七句さりかりおすも治を

一松竹梅。同松のひくさかきいふ句に風詠
二句さらに也し
一まつの字をさくかたと云類あへとのう
なからしきとも也里
一桂に木の字続きてもくるしからす一句
ありあれをきらふ也うす
一真木の戸に木の字又句隔て真木にも同お
云枝さらに也也桂や木の名なれは也
一藤生類は二句嫌植物にも草の字にも同
二句やるの字まで両を嫌や
一浪々　七句さるなりてやうのるよいあ

にねらふ名事なれやも遊覧言於公載之
一枕あのこりの渡[illegible]さくら
云字まてや東国の名所や
一鞠場に遊の心わらや一のかいうくとし古
まる遊び、まる皇后なといふ名所の心や
諸えよそ一のあり、あるう海しきやなり
只まりのまをとし経吉の松原なとそも
けられさらすわれしまでのかえうもく
しかなりそれを場の字と出なり不続近代
多くかもの字に用なり
一窓に戸面を嫌門ア戸まてまいいふ

一 古風并面のほとりてそへらへしと嫌とも也
されとも又句さり嫌也し
一 雑たゝ一さりのまゝきみあるへしりと
ふるきなりときらふ也
一 眉の字は浮物にあらすとまふしけれとも是を
不依理ありかれやる月次に載之
一 ますら男 に男の字面を嫌ふ也如何なる
歎かつ 哀と人嫌す也
一 まつ恋 待恋といふ字へよけのとき二句也
うたをそへひしとよむみせりしと
いひし 久を思へなとまつんなるを又可る

一 ありける恋初恋に同前なり
一 まくら寝 独寝なり
一 まとろむ 同しく独寝なりとも
一 ゆふまくれ まつの字やとめ字なりとも是にも嫌
ゆもあれ沢さしかす
一 海こし みるの付てもくるしからす
一 まし 額にて二句ありともきらふにあらす
一 二句去 付句嫌也
一 けり
一 今日 百韻に二句へし
一 なかるに今不嫌也此日おもて二句可嫌

一 今朝ハいつにても不嫌也
一日のこよひにても夜ふかくあるへし今
日と云ても七句隔て夜の詞へても嫌ふ
一 烟 七句さりて嫌へし
一 烟 打越に柴不芦薪なとに付句せす打越
に嫌也 柴をひきすゝたきくゆるを焼
と云数をみるかいふりて嫌也しかるへき歟
をふるなとゝ云数物にて嫌へし
一 世にふる里 哀傷也 非愛物ハ夕ありなと
一 うきふる里のけふの里なと哀傷にかへをと
一 松かけ水のたえのけふの里 数き火

一 なきの数おもへるしりてて状候
あたゝのりを 夜まわりわり川波の百首に
題ゆゑ夜の詞に入侍り
一 歎 生類に二句嫌なとにて題あれとも
式に藤猿ホれ数に又句嫌まり
一 獣 牛馬と云字二句嫌之し
一 ありとまり よさむあさなとのけを之し
二句嫌也 ゆきまふなすとも二句嫌なり
一 ありまさまふ 松つ緒の色て四なり
一 あらしらんに不嫌霰あさ霰たれなと
の詞にあらぬ余くらし いらんにさらに

一 あらしさわりても二句嫌へきかう
いちる並し　去嫌なしとわくもきらふや
うし迄それほどの句二句嫌へかう
一 下〓の詞の句二句嫌やさけときれなく
ふ見るかゝとくいふ數の句の事也
一 古今の新〓　なといひても居所ありなる
へりうち紛もありあしり居所すへき
事成るといふ道りならやうの事さしあひ
にかやかし旅とも用捨なり山数多し
一 皇居ハ所ハ　に居所うらかし旅嫌ゐし

墨といふ字ハさて句嫌なり　筆硯　硯箱
見るものゝ類なり此所にハ數ゆへき
此外所くハ旧新不可勝計
一 所へてハ新嫌ある事有墨も新をとも
不捨なるし同前と嫌ありたく新たくある
何とかの句是も同面嫌へしといふ硯き鏡
也も新嫌なりかたきと是も同面をくる
しの所あり分事也も是ハ沿ひを
一 故にハ所とたくゆうさとの句ありし　一様
ハ一ほ上二ならう勝れ嫌又墨となくて不所
也さたく嫌ろ墨と二をかうま

一故里とある句にてそことの古の字打て嫌
ふ也其の類にて可記之
一故ゆへとある句に家路縁句嫌ふへし
是も家路なとは遠し 但嫌し
一古の字の嫌ひやうは古跡古語なとの
辞打て嫌也 句数は句去二句嫌也
一句数これを句法に挟 やもありて遠すり
哀傷の心あれとも遠れ侍ことひつ候也
懐旧哀傷なとうちこし又其用捨可有之
一よすか 夜分やや恋なとに嫌ひて秋や
一船 海路を渡船なとはよそれ外依句辨

一大略船にても渡を河船 すてとめは
つれ手句称 あし分小舟 やまち句ね
さす小称 みなれさほ なとすへし
一宇治の川見 うちの舟をよひよめるすゝ山
載先度よとれ河舟けのるとれひなれ山の辞
不てうちをもいひ見て宇治ホノ句ねと河
に同おちるへきよしく人の度々句之れあり
前には不しくさしけるへきたあまうる
あてかにつ補見
一ふねとむる せめりてまさとまり句ね也
あまくし 但嫌し

一梅は よりつた付る事悪し又梅花の
うちにも梅開梅あるへし桃桜なとにも
所をへ付るはすそふらす
一梅花 なくて無く待春なとゆふ数は奥
ゆうとの木は嫌へし
一松尾山 併松山なと梅花に又句頭天入門
梅花事にし水色まて千句連かね舟の字
七句さるへし
一富士の煙浅間の煙 なと句にはよりて意
りけるを
一禁 ふ山吹なりとさうふへし嫌気とさる

一人丸は高越前若狭や但馬まてと嫌ふ也
此句也山色里よりいれて西をきらふなり
藤 多く 一藤原一李流の色て一他李を
りもこてみおるへきよりせ用すやと云く
是新式の詞なり李と替て世用とつれに
不許物らの外に夜衣なとを替て近代
只二まり物ら承し元なりて又物ちをまや
一牡丹 たく 一まりもかまるゝの是はか
あらて葉らえ葉なとするる也代用
捨を以てし戴之
一遂生 あさちふなとの生の字おくと可嫌

一 冬枯　草枯なとゝ云て生ずる山野の
可有冬の季ならんとくする人あり不謂
冬されの野山に　植物は打越を嫌へし
一 物ゆへの連八声鳥あしや　なといひてを
一 植物に打越と嫌ひやうけのあしやなと
いひてもおなし深き竜も二句き
らふなり冬の季人あしらふ事也植
物又もありうらあしをきらふなり
一 御しつ書　言葉おもてをきらふ也し
日本記に葉と出てかしとよあてしりき
ておりとしきしめへきそ元

一 山の雪なとゝ云事　植物にあらず
一 物のうへにみえ山なとの深丸字二句可嫌
一 鳥の物と嫌へきてあるの花はなとゝ又云
いし咲をゆふ字二句きらふなり
一 物中は風は又句きらふ深林にて三句
嵩にて面は嫌也深とゝ云字物くとゝ云字とも
は又句嫌也ゆる
一 浪船なりひなとゝ深うる事浜奥也
絶峰ゝ
一 更消物くは風の物く同字也又句嫌なり
多くしてありてと嫌へきのさいる也

一物くさふ賦分なり雖なりと
一月の物くさ　ありて又賦の物くさ有へし
一賦の文字　字物くさなとは何分文として其
賦はあの事如遂鳥為色物くさ賦まて随種
つくる也の色つと

一文字とも計て賦手なり文とくの目打
と連物くさ賦より物うちの二句きらふ除の字を
いやなりとも続と二句連なり
一文並の一振より一文字より一五重三句の内
すこし新式のことくなり文字を五つ所也ひ以
の色をも意あるてなく一や

一文字字不付ひつれの文字てときくふ
なり菓子も子とも不さて不可付也の色て文
字子とくに又事外まてへし又今もの所て
詩を一律字との数又の歌へし從あの義
あるの也の色て続て又不可在之花
一筆多く一なり
一物たつ人倫にあしすひとて其人倫あり
一まこれくふく川く之ろを
名中又にてなと物れく此字よありて振
の字のんのたくし句りよ随へてあり

二

一しんは月　釈教なるは他数月まで七句去也
しんは猶の事也同し面に秋は月何そ入へし
見えまく月とかはる事　有り
一あくかの園　おなしく数分にあしき
一しんの友　人倫になる色りしもさらなり
句よりも入へし
一しんの松　植物に二句さし嫌ふたよくの
事也いろ色又をくなるひと也
一しんの松　植物に不嫌詞の字のんすにしの
松かう色にも二句嫌ひと宗祇八十ヶ条にも出たり
一あらたの松　春の字にも又句同し字去有り

所詮しの松んの松やうもありつと植物也
二句きらふへきやいの色也
一しれ花も花やみ植物に二句嫌や新式は
竹をかやまわせしりかに於ける書也
一竹の花　竹の花に他花也去之の連歌
此は毎に面を嫌なり自然花に因果仕去
ありやうも雑也
一きれ馬ひく　詞の様　ともに生気にありけれ
一おもひ又といふもとなり　発句の字又句
嫌也　他句にも取用也
一試す　ころの字二句きらふやよしと

此も同前也
一 木葉衣　神農氏の時ハ木のはを綴て衣
とすれハよりて植物也あまり嫌之
事あり嫌也新式ニハ不及東家にも嫌所
許ハ事也元の事これハ當時可依仕立
一 七夕の衣裳の事ともに衣類より外衣
の字にても七句去なり
一 木葉の雨　此降物木の葉の時雨を同前に
取へきか先祖嫌へきかの山谷篇雖宗師説今失
念を與可能好士ニ為へし後見の人々こそ
其のむきしとおふくそのなりと也捨侍り

けるに今時までこれを好ふる好士木枯との
雨を雨とハ用也さる句体かハらし降物也
被加筆年も可信用者也
一 木葉ちる　ふく山おろし有て同意けり時
奥也従是而ハりいろ々しく執筆ニ
たのむ也色かりて
一 木玉　木の字玉の字共ニ五句嫌へし
一 こすゑの秋　植物ニ二句嫌越したく
一 米の秋ハ雑也
一 稲　只一花にも松にも似て色て一あきを
色のわさか此中にあるへし

一木すゑに末二句嫌なり木の字同前にこと
忌り持付てもくるしからず
一こからしは木の字のかくと云字ともに
わくときらふなるゆへ色嫌ありあしらふ
一木枯は冬のものなれ共わくを嫌へからずや
一風あし一句なりてつゝくまじし野分の風祈
は昌なれ共ひかり色てこそみれ又句主なり
一萩乃かゝゑなといは二句きらふなり
一九重より都迄すり持を嫌すり出ての字
さゆめのかひは人つれ同前なり
一山路居所なりうくひ嫌なくて其居所

一暮は戸の庵にうへ嫌なる居所なり
草を筆は詠の影嫌にかりをあれのち
精数いゝもかわりてといゝ色々
一篁はるゝ人物也秋分なりおらずとも
なくして秋分なり
一鈎篇は木の字不嫌木の字を出る返し
一越路より居所二句嫌なるまあしは海近い
へし名所は三句なりいおすも泊を
一あし路はてゆくと云調二句嫌越路より
あれ海なとゝ云ま二句きらふなり
一逢坂山塚白河名所はさるへし持出のさ

一 公事不用等こゝのへ作りやうの事也
一 逢恋 句ハ神ゝこひのれくひ合二可之く
はしくん 猪こひれ海辺しの雨に入
一 恋の哥 釈教述懐ホの世れてゝあつ
てし是をよをしの雨にくよし定数之
一 恋しくて よひしきらひの色でとわれても
のひの色すを二なり似こひし乃也二と
めるといふ話の事
一 恋字 雌雄似こひさまのしりうき読く
なくいらく雄雌よ二句嫌なり
一 詠一うきらひ一つらくさきの間ホ一

月の出おり 波のこおり 雪霰ホれ同てし 一
永宴をさけりのうるてありぬくしう
すゝひくるひうてきとき色うつをひとゝ云
あらそひをゆ色すりいひの色なりとか色て
四なり後しひしむろ四の外すり不論要枕也
川ていふよお一月なるゝの是よ 一 霰霞ホ
よ一さきひつるしよ一なりひむろを初ホ
きとえくたくこゝかまよなりと可嫌とや
一 雪霰なるゝホのこおり 水色よあつゝす霞
のとかろうるをうゑこたれ同句
一 去年ハとし ともすり 一句れとのうう

廻し侍へし

一 今年に今日今と云字まても一切にあれと
きらハすつけてくるしからす

一 涙の字　は連歌集近来にも二句
きらふ也

一 涙の字　詞にて回とあれハこそ近代ハ二也
韻にてもなくて字さりやみいたく韻に回い
まても可用あまり連に治定をも

一 涙打腕　何も同んなれとも片置二句可嫌也
や似如片にの詞にてあまり念入まさしき
事也并男のさしき充と云ハ云なかに載之

一 詞に上一云の集を一にも九ものかいは外
ありめ為へしや云て此上打と替れまり

一 紀ノ集の字不嫌之あとのやいてし
氣の字り又句嫌也

一 こところ　俳句によりて可付かと成人に
京にてハすなとハ俳書をも文の事なれとも
大略可嫌とハ毎句如此也し来変有るこ
ところ上下壱の内に二三ケ所まて之雖然こ
いひ出まハ何ところさり也治定すへし

一 こその集是　前に式に又句可嫌

一 云候集　にハり一二句嫌てよりと云ハよくもたし

二句なり共ひとつにて嫌ふもの留二句嫌や
一 ことくの林　他捷句の詞なと道とされは
事なれ共此の一冊ごとの不審ともた
ましたく思ふより爰に載之
一 ことはをより詞ホ又海士のさまさまに
云より二句さへ嫌ふ也
一 つ也あとむ川あと　をと云ふより古事なれと
事の字なれ云ふよりの留付句ともされ
礼きしるす
一 理てホつ也あとなと一切よ不嫌之や
一 ことふ家か　まるより字きらふ也りらす

一 子を思ふよりつけ置て空あるべしたと
へし親子をいひ案子孫子なといひ不可
事なりといつれも可嫌哉
一 小鷹狩　うけよりは同しきまとやもあり
射おりうけらより小鷹つみさるらし 一鷲
あるやいふ也ときもさるしりうさるうらつつ
うりあまりうき鷲走れ心ははやいふ句に
虫の名や小鷹れまさ海のふらん也せめの
さくりけり鶴鷲のさと雉の字なれともと哉
ときらふといふ也望他うけらるゝとなりまり
西をと嫌ふ也し時をさしきふとのこゝろみれ

秋なり
一 鳥の跡に　うつりの名なとおすゝ雨と嫌
なり霧ともしまゝの下に入
一 鵜鷺に　高羽山なとにもあしも不嫌隔入
高羽山なとゝいふ可隔五句下に入
一 胡蝶　水の字不嫌之付句にも不苦
一 あく町して　とゝいふは此の字是の字の数也
は二句きらふなり
一 あひとも里　千句にも二計といふ也里
思
一 江　只一字にハ一座江三句江かゝの数也

一 思ふ　かやうに詞百韻に一あくへし一すり
候儀し
て
一 ある　ある一名所に一あるへし
一 ある遠近といふにも居所なかるゝすたうれ
ゆるも前越ぞ居所可遠周挿あるなとゝいふ也
をしへ入
一 ある打越に　鐘すゝうすのやうのまお
義なり不可遠周書也
一 手の字　打に一句ゝ合し
一 手に　波二句きらふへし袖とてゝゝ不可嫌

一手に　手枕なとゝ云ハ數両と嫌へし
一打合てはまてしそすらし不嫌之事あり
一てしかせりよ詞は以よ二句嫌やてふ百韻
に二ヶ所まて　此の詞は大略二ゝるへし
一下の句のてかまり　千句にも多く一すり
にとまりを用ひたくしかまつりたく一巻
此分といへり
一同下の句にてかまりなといふは上手のその
なり初心の上にてそ堪用なり
一文磐橡船　お色なりわかく千君舟にすし

弟也日本紀に蛭児のきて以流放棄之く
せなり
一天河れはかふ瀬なといふ又舟を読ひくと
お色にわりす秋也又多くあまの河と計そ
二星はかくれし句にまて名字也水色也
あまの河のあふ瀬なと秋分に又句なり
一天川　舟とてもひくとも水色にはあらされ
とも舟の字は一句七句去なり
一天の字　空にある也天は字は二句嫌也
一閼伽棚　秋分なり稲田之外と云称不嫌水
此字の禁法なれと可嗜用といふ也

一 みなせ川しま 右に付て津国に二句嫌
一 塩小松袖湊と云ても水辺より惣山類
一 近江の海 ふなとくれを国の内之 右
取十式に三句嫌所々ハ不注之
一 粟津の原 水辺也あらす
一 明石の浦 名所付へからす
一 嵐山 此事とやかくもあらしの山にとい
ふ風祥より二句きらふや
一 小坂 山類なり山にあり関を勿論山類や
浦にハきえてハ水辺也 小台迄 如此書改
ハ遊字にて二句先

一 淡路は国名二句嫌や山路なとにひかれてハ又
句嫌はおらぬとしかれも載之
一 東路 二句東国同じて嫌山におきて東遊に
ともあるましきうに何塚国の事や
一 あつまの 載路二句嫌也 あつまれ名所
新治きらふなり
一 暑明 四季に合一し新式にあり山の山也
みくなゆうしを不許状に一三季の豊ちり一
次上二なりてしも別由りんの月の前に
載之
一 有明 ふりのて云字にて二句嫌明の字になりて又

句を隔て付句迄ハうるをも

一 又鳴 まきとあしたきとハ如此これとも

此川町(?)なる事なり濁乱を取直されすれハ

もろしハうを

一 あけあきハ月次の月といふ字又句可嫌

一 又鳴の詠ハとしても秋にや あけあきれ

入としても秋にすへし あしをも

一 鳴色果 秋分にハ物にハをもてもくわしして

て名り あきをもなれあきとも嫌也 遠もとして

とも秋にハあるを如山の詞鶴夕時分とも

一 又二句嫌耳[illegible]

一 鳴蛙に鶴の字又ハ鴫むかと云詞二句嫌

なるあきハのを同前

一 鳴鶯と聴くきょう詞可分いつれも不嫌

之夕の字よりも二句嫌や鳴鶯の二字へ同し

字書より鶴夕に鶯の字同前六ヶ敷なり

よく〳〵分別をへし

一 あくるといふ事も二句きらふへし

一 秋のあくれハ戸にあくれつま句ハうるゝ

嫌やあきさハのよ戸とあくれも同前

一 あくる 又曙秋分のうゝれとも二句やあく

れハ曙も同前分をなれハ切論又句嫌なり

一鳴園 并ふるり嬌 并の鳴はんとする時も
くくなる時制ハふりすらい霜ハ字ハ二
句嫌越すべき也
一蝶 たく一色と春に時也んや秋夕やさもよ
二句去りとりふ細きに二句嫌ふとりふ細
一座よ二ハのうちや
一鴫 たく一られあいつきに一たくわうらき
今時分のすもわくろ并も二句也
一鶴乃字 是や折ラ 一作くなりわしハ一
雨さと一 以上六字のわしハ今鶴を翻ハ
うらうらあるを也

一朔の月 なと鶴の字入ても百韻に一なり
夕と同前月乃あきをててもはと又わかりとう
也そもあるらしあしさの月乃新月そ
しても一なとりふ事いると是を月を
日前
（朱）一明朔日
（朱）朔ノ月アリテ 月朔日トハアルヘカラス
一鶴附日 ゆふ陰くひなと只あさ日ゆふ日
すつと損ふ不嫌 然あさつくひ夕ひの異字
とくいちく月ふ又白ゑらふなり
一あさうら前 多く時ふらるとなり
一様 よ鶴の字新式之趣ふ可意歳といふハ
永代如多く二句可嫌此等可用也

一めさの外はしらめりかは嫌ふ事もし
はほし雪を明といふ字は二句嫌可也
一青葉ト鶉鳥なとそうしもようと
案を付事紛の用付てきらふや他集し
一あとよりきらふ二句さらふへし
一青丹吉 と云青山も吉方も二句嫌也
一遠色てめし大かたあるめし
りとそとの嶋は一ときこえ嶋何これを嫌也
一芳菊めし火をは出る名のきこうち
なひく下りとなとり色海洞を冬来色てを
一捷相春遠ちかへは二句さらふや如くわしや

一めし火をのうちを春遠はあらそ捷相り
あらす文の案の遠春とおの番也
一あり川鶏 捷相水遠やもす不嫌之冬
されはわしいらなとあらう色そのる
遠くもは二句嫌なり
一何し鶏の色相はは不嫌あれそ水色也
なけのめしのもなとの色てしらんそのよ
二句嫌也とみるすし
一あやめの海くら抄分なるうへこれなり
あやめそなふらしても水色や
一浅芽生 居所に二句嫌なるは淡筆とてのうち

一 天雲霧なと云の類生也生の字打越嫌也
あさちふの宿あまおなし句嫌也あまならし
居ねとうちもめもめなりや

一 秋の田の鳫鹿と結ひくりもとのうち不通
事にも田を常よき秋は田ふつうの事也殊
落して季と付時はうちもの不打越さる事
句論に鹿と遣なとあらしても雑物に二句也
たとはゞ秋の田と付てうち捨よあるまじ

一 あき風二ならあき風と入るとも一句入
てもみ一とある風ならびもゆる迄及す如此
れるり見易やうよあるまじ

一 秋の字羽衆はんなりけり字のをもと云うく異
ゆ色にまた字二句嫌也

一 秋さみしき やくさひさ夜さびなどいつれ
なりとも桜さひ季といふまたく一なり
猶さしきをわかなり

一 桜の海こそ まあきれあつさなと同扇を
不当をいるの他仕てまなりんる五季嫌体

一 秋の夜 と云句おかきかんわりてもなりき夜
わくときらふへし

一 恋の字 同字也や古恋は数てもうちをきらふ物
待擬し恋なしの新古恋也

一 鳥のねとは千鳥のみ付くとあてゝ一句と
なしぬふとも字ちやられ共も文字のこるす
なすとしがたき可嫌也ゆく鳥のわやゝもちうれ
ちゝなとゝ文字乃んなし絶体しみるしくれ
霜すくはしく注之
一 雨の一さゝめ一なとゝ新式に載之といへ色とも
のゝ下も雨二すり迄代如山あらたむるす
かく是より不給雨二級摘山外にあらてし
とし松浮八あめふりの事如雨一あさ一ち
くれ二夕ち一又月雨一れ於ん ||
一 雨乃通りちくれ乃あめ又月雨のあ絶

もあらへしちくれの雨なとゝいひてすまく
ちくれまでのるすなり雨二れ外や依て雨
に只又句可嫌夕立のあめふとと同前也
一 雨るゝ雨ゝり時雨夕たちに如き不嫌何も
もはあひさ五句さりすり先祭てり同前の
ことすなりて又載之
一 あめあまゝかゝのゝるてり河めあるへし
なりぬともちかゝと同前
一 雨といふ句てり苦嫌く又水海さるなと
付る事は外の奥や摘合てはそあらすか和
こゝへきすちもみぬ数や

一　松風來る河の高木乃わかめ　南本入りきらふ
嫌ありつれとお後所にて入

一　あらし　近代二句り此外に嵐山あり同字
入きらひやう乃准すり則一両句も可有之
危後書とあらし山かとく風情のんに用
さらや嵐山にかはりてきらふ色し不論伴題山
に馬面と嫌るたくわるし山といひてこ

一　あらし　れ和もてゝと嫌へか危

一　何恋乃のとこ　居所に二句嫌へし

一　網代　あ見えにきをおりと嫌やたろにも二句
嫌のもらい色中とも可嫌両魚とるあえ特らこ

可申嫌へし　籠の網ハ七重八重見ゆらし沸
様に七重履網のるりなれと如此なる八二
句まてゆふ事也

一　網　りあむむ同きらふ色し

一　海士八　たくすし　焼うりかつ縄あとも紙
たくるもやハ人のあやまり指合なり

一　あゐくり　に古來二句きらふやうさくの
なる日となくて春におしさるゝ不理

一　なくゆくさり　の春すり

一　みつ糸　に添し嫌やあくたのとをさき海

一　しまくし　すかとの扇を何き之二句嫌や

一 あふきなとゝハ秋なり随可依句体なく
われとさし只秋たるへし
一 あるしといふ字二句きらふなり
人倫やめしとも人倫にあらす
一 あらまし　ふさと字不嫌と新式にあれとも
二句嫌也不嫌也は色紙を肖柏の今案なり
是をわかちまつなりとは色々此外のうちを
肖今案を當要不可用之とのなり
一 消息　ふみもさ候にも二句嫌へし
一 吹あらし雜の風　なとさして風のわくうき
ふさともなし

一 あら玉のとし　とかは荒の字に二句嫌
へしあらきハ破の字の心や
一 あら玉の春　と云事なしとは色々あら
い海の年あし　玉の始なとくとあるへし随
わかさの春也云へきとは色々
一 あかては　り雙色なとの色の字嫌なるか
とるまても二句嫌也
一 うたりてあられ　なとゝいふ調大略皆同類
り二ちるまてあるへし
一 品うひなときは海東の品からの数二句
きらふへし

一 里神楽　居所々々にて禁中の御代の
しるしとみて里かくらといへるは

一 桜の宮　彼の宮やかて桃居所佐保山の所な
れと伊勢の末社也

一 佐保姫　此神龍田ひめ同前春ひめなと
いへりつきもひめ一名に二也

一 さほ姫の衣　此衣裳おほくも載之取ても
須することもやく可見出たるより

一 さほひ免　龍田姫ほと木になる色しも今
京ぶ浴衣しゆん此儀可用也

一 桜人　うたひものや桜狩に二句嫌也人
倫にあらすけ人の字にても句嫌字なれとも

一 さくら　只一連桜山さくらなとに一句嫌
にて又いろいろとまさくら山桜はしてたくさ
くらと二ツそてゑ木若と云く色彩けいは胡や
さくら二ツ嫌也十ス夜冬の夏より何らそ春
のさくら二ツのからさるへし二ツなにし花
にいくはもりあるへからて花に桜狩付又
さくらに花と続く花咲此地嫌也有
之を蓋猶過なるへし

一 さくら戸　ゆ本有嫌とくて桃その時に居所

一　又一種なりさくらのかうこの名の事也

一　楊梅桃梅や大山桜をいふ也以一色あり

一　花の座に開く字を出しても又とひらく
なとつまる句はつゝを嫌物さきのもいはへつる数
の字をも聞く也色なり

一　咲をいふ字にもちるもあり――

一　藤は春に色をのみあらは

一　行く春くらうへ嫌なり様分なり

一　行く春　暮春なとゝいふはこれを居所二
句さしよなり

一　さて花のとの名面を嫌やさてもゝす

ものゝ名同折をきらふなり

一　さくらすゝき是は三なりとも草乃類といふ色にて
後は木にて三句まてなれとも又句可嫌竹にても三句
嫌といふ色也又或説に竹にて又句嫌と
是をは同前の色をいふへしことに是は浦浜を嫌
不論草の類ありて可為分別なりしかたからて
又句嫌なりとも又猶先可用之や山伏のすゝ
かけ藤の字と同なり

一　行く春　草すなはち行くより紙ものさきや

一　早苗　夏色にありぬとす

一　猿は只一海のみ一鶴ある八数や

一さ山々も山のあろろすり小の字ま付句
もろこきらふへし
一坂あく一名ぶりひとい
一津たく一名面ま一ころ遍し
一さすろ色乃船 なといふろ流れあります
一行くなとや大河の文 なと抗詞ありとも
水邊なり能候く
一行くれ名さされ萩さく栗 なといろれも
小の字二句嫌なり
一さそしふまか萩かしのその字付句沙嫌
や男康もそふの字不嫌大かさともしま入

一さ夜嵐うきかふ鳴めらん なと付る今も嫌
一きえ春秋ま何も可ある山外まさゆるとも
一さ毎もふ有り河ゆるうる西ふあり候間冬
まそあけ入うるすその さ毎もまつり 秋いさ
ゆるうるふあるへし
一行むさふおあり 志むをさましあくるろ
あつき杏栗以外をも二句嫌へし
一さゆろ嵐中ま一沈事なり 一以上二や
日入さすり河々ま嫌分さす なといれ
もおと云瑞遍し 二句可嫌ろやいるり
毎さともも同前

一 墨にハ三句に松竹水なとの類を付て
すりあらしおほきうきなとの類可嫌之
一 墨ハ海士炭焼人倫也不依也しかく
もなくめられを依句非人倫に可為也
一 酒ハ色ても紅と酒作類をハとをくさりて又意
なとハ用ゐ可也此ハ以て替名数大略二や
一 河のつらの光なとハころ無くさんと也くよ
二句嫌や夜ハ秋ハ季にや是より式の月次
これする事ーわり候てもわたの季なりぬ
月よをミ句さりに嫌へき也
一 冬月雨あめく一梅の雨一もしめ此等也不審

なとのよしとをとるもしのたにおほ載之
一 冬月よりかハり秋を冬句嫌月乃字ならはまた句
きらふなり
一 さいろハ旅屋なとの句にハ二句嫌へし
一 田のさいろハよみる嫌色くし
一 頭面さく意しさなとハさとし二句
きらふへし
一 さきわらをかれ也ハふ句またの字二句
嫌つまなき也
一 さひしき世清く面をうゆるなり
一 さひしさひしくとらひの色てう

ゑんしや式目にはあれども毎くいひつ色
をも二句也
一 さびしきつれ／＼などといふ懐を持る
事はきらひもとより色也
一 雨や小ものゝ名所を句にしたるを嫌ずり折
もしの祢に成也しき注之
一 ふしおとゝいふことを百韻に二句をする也
うれしし悲しく
一 さらりと云詞はあとにあら二句嫌也
一 春されを夕さまは去の字のんすりてを
なし去なれもやいふんなり

一 催馬楽おなじ可准縁としられそうり
よりそられ書を持とはゞ事なり
き
一 大君と人倫にはあらず曰の君なとといひて
も人倫にかはるを
一 大きには祝言は君に親ましきる句を越に
諸人多との新題し新成さる句ゆき嫌之
一 昨日一座に一句有寺所にかふやゝも
あるへかるへき
一 昨日の鐘 今日のゝ手にかひゝてをとも
また晩鐘かくもなれおなじ去嫌之

一 こし一ツ宗祇に一條右大江のきさ殿の事
や姫君二の外なり但あきらかに之を用べき
といひふるきを二ハ外に又あるべし
をはなれの事しするとこそ能き事の事也
一 本と末とよりこのはなれて一句あるべきの
すそなく是二句去や大様に
一 末とまたハ又本にかよひても其趣向
一 本に数二句さらふなりたとへば末あり
を二句さしふるべし
一 本草に本の字二句嫌波也書ゆるすなり
神中衍に是之

一 進文は本の字同しくて二句嫌人倫也
一 几帳は木於同しく是も二句可嫌但木の
字二句嫌物也きらへかうといふ也
一 筆の花 焼ともふなとも菊花などの事也
拙物は二句嫌なり
一 きく字との事て二の物にしてもいふにて証
かるといふ也是一ふさふ也し
一 筆の割 云ふ也なり
一 雲の流 霞のうえ其のうみのつれも云也
うりかしうす
一 きりの雑 長雨二句嫌也據に面と嫌但

一 海うきに濡ぬものときらふべし
さり乍雨ふりを初嫌や露払りを成越と
きらふなり
一 菊為と一句有てみ立月ひまなくしよろ
へし條々
一 菊の花 季重るものは必秋よ嫌花の陰と
を詠じ之て菊すりもつ不乃所すり
一 きぬた 一座に一句さして又衣うつなと
あれば一句あるし衣うつやいひても秋
ふる也色世用すや
一 きぬた ゝりし花重ね二句嫌ゝりきぬとひ
てゝ又句きらふ也や
一 碪に秋又句嫌又詞れにゝ嫌やうの事
うけきれとゝありされはつゝ悪し
一 きぬく 妙花紫継二句可嫌秋分や
花のきぬく おとしても秋ふるし
かきもいふほくき相花
一 蕃 也てきりくすまる なとも又可嫌花
えうしゝ月の月二句嫌へし 殊生
なとゆも同前
一 手作くれ に衣二句きらふ也し
一 蓑き ゝ迯き添れ濃れおとのきをし

一 不嫌之所望にしたかひてを或人嫌とも
ゆ色に載之不嫌に治定せし
一 きや とも云詞おもしろしといふんや
一 庭にて 一や後勝し
一 盛りさかり いえさりさかりの名をとし
二句さらふかはりの
ゆ
一 ゆふたく見 とし切つるしての たくと
しる盛りて見ゆるといふ色也
一 ゆふけの色 勿論神祇や水辺なり
一 綿木付鳥 神祇まあつかす秋分也四所の開

八雲にもみゆる也
一 夕月 あく一とわれはたそかれの月なと
又なりとり色もおもふし夕の字入てをも
たく一すり後をゆふ色はあるゝなる月二
わりともしるゝ雲つゝなり
一 夕日影 也秋にゆふ陽ひともゝ日の入事也
是を韻附日かけのあかしの雨中入
一 ゆふ陽く 里の名なさ上を天象よ三句嫌
きらむかし 夜の事也あれを色也
一 夕の字 かく一所くより神婚色と二句上
六也ゆふのもゆふ婚へ二てあるへし

一 ゆふ細 一ハ春秋ハ暮年の暮若のくれに
のかれも二句嫌なり
一 夕も山 此名所に夕を添ても名所也 肥後国
かせいふ夕を山にかくて夕の山のことや
一 中細色は虫の色くかけし付ても不苦り
常も日くるしの鮮なと心もなく二句可嫌
一 夕くれハ丸もはくさゝきに漏百韻に一すりに
おふゆ細さくれもあかまりそうに一中細
海くれハさ文字やに見字をれを孟昌とも
ふうまたときらもにる事のまへ所きらい
入なるへ

一 夕暮 と云はあまたなとつゝけても不苦
打越に夕暮しも 打越と嫌と云は皆体數や
一 夕園 夕の字の外や夕の字に又句主なり
数分なり暮の字は二句嫌餘の時分不嫌之
一 ゆふの外は 若 棲鳩なり是も夕の字ても
又句主や夕の字は外に暮の字にも二句時分
まかふを世の遍ゆもうちあれハ時分に
むけかりうらんのせて人に霜待遠ても
うし四善なり
一 ゆふたち たく 一如けなるそのこみれ一
まるへし夕ハ又句きらふ 暮の字其の字

一やうも不二句嫌也
一夕立　みしかきを除てうちあけ又雷電不
可除云これ新式ハ詞や
一ゆふくらの面　なといひて之面二ノ折
なり面より句嫌同面不苦たゞこおする除之
一ゆふくら　なとしても夕立の事也　又
ゆふへなとある色なるを除構まて二句可嫌
夕の字立の字やうもまた式ニ可嫌之旨の字ニ
も夕附分とも又句さしゆふへしゆふくら
のたくらしともなるまじゆふくら除とも不来
あるゆー

一雷　可也此外云ハ雷一処嫌の雷を各前の
事也近来為可句物云ハ雷鳴と替用之此定
の雷也可ある春雷雁霜土の雷なる作者去又同
近道如此加云雷可なりハ上新式の詞や
不給作者世まですり中に除也の中し
きゆる秘書なとハ色とも夜すり此家の証さ
ても春の外なれと雁霜土となりゆく此室
の友余せすり中古の説不用之かくの中
きる作者とも一同とし面とりてすへし
となむすりなるまて中古の再稀や
不用之多く要次とみていらく似しの初

ゆきなとも冬なりけるの中にさ植うとも季にして也
と心に趣きなりぬ結構き成り思見ゆや
雨ふかくらして破邪説の たられなく
見雪之似猶のゆきといふ色折を句論日乃
ゆき花のゆきなとの類なり
一 ゆきふ富士なと付てみひむろ嫌也物し
の雪ひむろ有り同前の様なれとも有り
一 雪にみられ物にふかなと結ふ面を可嫌
一 ゆきまゐられ所くるゝ今は嫌也
一 雪ありたくひむろと付くる事もあり
趣ゝと云となり同前を可嫌也の無り

一 雪の花 梅花なりわく千降物まてや
一 雪と云句によるきと付まてみ消ゑなとも
無し其同名に嫌を連歌れ大方とん
一 雪 消六ツ花なとする類嫌まりけり物に何
花頭も降物ますへからす
一 弓は矢数乗に於越を嫌而千入をこし也
有り云弓法月年の矢木旭山類在りと可嫌
云く矢はさらん弓は矢二句嫌法も打と可禁
や弓法はと弓も五年の矢もやしのおひさ
打へうゆき 一本れゆきこや遠まてとしの
矢木もましきとりふ 法不随尤強星乃こと

しも月にやといふ類又あれあるへからさるの
不治定也
一 ゆめハ眼前にあらすとおもへハすれハ服字也
一 夏七句去也大方夏冬ハ三句なるものや
うつゝねの夢めをかくよむさひなきハ春ハ夏
秋ハゆめにとく春秋の文字入てこそ恋し
なりけす又ゆめとの逸をひさすゝ恋になる
ましきあらす
一 ゆめ一まうたゝねさめきはなと二句嫌
現也ねあるまてまむなと面と嫌する也
一 夏ハ内く 也住つきまる詞也服字にたとひ

隔くうをして夏といふ句にハ隔くといふ
詞のうちたらもハ隔く此所にてひのまて
服字にならす准之
一 夏といふ句ハおもハけ也隔まて朋友
と隔くれ事もうけ物といひて逆乗界
付之史にも理かし首ハ色を嫌へりしを
云々此上新式之詞也
一 夏の夜ハ数服字にあらすみるさひるか
とくあひ云かなく句にもまて服字になる
へきあり
一 ゆめく とよこともを夏あり二句嫌なり

一 発句にてもを
一 句は句後二句嫌なり但方人句の句と句をとし
二句去の句の句と雲鳥などの句の句となと
いふく所にも末にも又句嫌也しかれ
如此之相違是あるべき者也
一 句は山の色々又注末に二句嫌や文字
かはる由也なり
一 句は去句の句よ一座に二はなれてきゝ
えし所は去てゆく港同面を嫌へきなり
みくに元と出へさかんをみれ用捨此詞
有り大事を注進なりとしとも也

め

一 名所 只吉鳴雷神加茂上社下社也此外如山
なる諸社みな此名所
一 名所此名所とも伊勢でわまでゐ神とも
経にとうてゆくとなるゆくとなくいひ
山王とあひ山の社をいつ敷島の宮ある
神なとらひの御ゆらと名神也といせの
神酒するうしの社の里の神とは色をみな
名所あり法度に
一 名所にかゝぬとしるとうくし點をそ
名所ありけるすゝもとろすあゆるこうら恋しよ

式の兄ふくろしうらも先へのかしこは
川よりそのなるゆゑなりあまたを自然のる
なり不浄之雨中わろきところをかくし
あひうりまくかゝる世用なり
一 日をさるゝなく一なり日ハさめて世の
うき閑なくて見ぬ目世いふをしみ一ゑ之
よそめにやまもんうけるあそり見ぬめの可
ぬ淮うふやうの事さのミ海法ありし
おまの先あるへし義端あまりよまうお
れさこ世用すり
一 めのさ海をかね なをそりみるつまてゝも不苦

あをくし白袴うすあかへなと先
一 いろ先くろくりのめの黒おとの先くといふ泪
わよ一清くのふせの色まて
一 先晃のまておらしなりといふ言葉のみや
み
一 見てくる 繋なり此八字ハ不遍之
一 源揆の色や神祇すれ拂拂なといふわれも
付てたくるしかるをいはるゝかも開あや
六月晦日おあるまうすり夏の過来小蝿と
おつまて人を払をはふ色替れ事なり大
本世日まて遠といふ色やもみれつゝその中い

用捨ハみえたる実義ハ也みれハくまきよ
くもる月をゆるしてみんとやすらはし色
まつらもの川てもりにはきしきる讃談
也麻のゆふしてなとくもあるへし
一 帝勅神子三本 何凡字ハ不嫌あるへし
いつれも二句きらふといへり
一 帝ハ門の字面を嫌趣きり
一 何学ハめの字二句嫌趣し
一 うつきその 何の字不嫌と云説如何候し
一 二句のみ句のあくみ句ふ可治定といへり
一 三鐘聲三音聲 ホ 桃何字二句嫌のよし云

一 見たるみやこの原かな代乃三坂 皆何字也
一 沖つるハ 鶴なとの何くる事あるたく
しかるしかりさる事ときいへと
一 何階ハ 禁中あるに被読中もありのこる事
皇居の何ある 一切に居所なりとぞ
一 何の字ハある 折々被嫌也あり所もれハみ
ゆることなといひつゝ也ても面を嫌也此説へり
物を用しられまくるゝ面を嫌といへり書て
好士ハ可為な哉未明ける君もあらハ理批判
せすへしたくしか可依句新作然也
一 実 非秘ハ二皇居ホ二いりまとられうら

一 作くに名所なと作へし 必入 宗匠を神祇
釈教のことやなと宜しかるへ
一 恋や作り置ハ当代字面と嫌へし
一 次懐紙ニ雑しうし 秋ニ述懐付たる
嫌なき用付のうすお嫌所ニ不入
一 韻ニ大ことや打越を嫌と云ハ作式詞ニ而と
きらふ嫌といへ共此儀と可用わするへ
一 韻只一名所千一詞ニ一也わりとも一と
名所なりこともとひよりせ又たく韻也なり
めくり二まてもすへし
一 発句と云句に巻頭なしなと作きそしみ所へ

遠し無新韻ハ所へおもはしからん
一 新ニ四季不嫌他ぬなり可付事用捨之
ハネテの也ニ歯季嫌色足此發可用なり
一 発句ニ其次の所の数をおきを嫌也ともひ
の所ニことわすしてもなく是を面を嫌へし
只わかるさとを二句嫌景ここにけそ経ても
いひのりそせきて廃悪治事とこへし
一 ことやことても名色なりるまことや由ニ面ときらふ
嫌へしなと云こ
一 三日月此出るを如此投分入を投分なり
一 三日月ハり日を付る事不可嫌之

一峯二まり一句へだてゝくるし池哭濱なと
いけ迄も一句去不けりたくし嫌そく
二もあるべし
一峯ハ高根ヶ嶺と嫌是をいつれの説も同し
ミ特ハ尾上甍山ホの事而と嫌ひ治定や
おり頭きらふといふ好士も打続く出れき
たく嫌をきらふといふ説之りる色つらん
り嶽山の鐘かくのるやもしゝ奈穀之
如は未定れるハ歯雍之可随之定やたとひ
又在理る糖こともも不可有諍論
一見なれぬ山なうてね山見なれぬ浦　なと

いひてをき山なり毎くし山哉如何句よ
よ在へきとりへ王
一湊二まり一座可為不為嫌ハ字不嫌之
一河ゟ水二句きらふ也し
一水鳥　なとゝいふ字あれやとも用ゆりあけす
新用の外や
一水ハ不りえ案之明くはくみこりける海
なとゝ所れも此数又句きらふや
一水ハかみおもて紙不付之也ハ為り之かれ
二句きらふへきなり
一水くされ絶えてくつけし忘鉢なけ連を

深く成り此句は用しとの人出也とかし
一 誹諧は連歌字に於て付句はりしうしんう
一 歌あら一大体は深み見きりなきといひ
してあるへしとす
一 歌におもを二句題ゆ色を遠きつけよめ
き付用とい色を見きりそひろきんあり図
金なとのおもてはり遠なけ遠やもうれ見
まて我りなとの人ハしのかきはさ本
気色ハ不や細まも見きてにとくいゑろ
由色なり
一 花もり菱形露路作の庭を二句嫌なり

山路なとハ色々あゆむ路にも句きらふや
ハ本ノりを注之
一 色は玉かこちまさ深くら打り云ともよ
二句嫌なり深く遠おり山類なり
一 宗の道なとてり山路かとも二句嫌也
れも一本の家ならぬいを是二句嫌なり
一 見それは雪を雨と種や為にも句嫌なり
一 是のように二句きらふ嫌色し
一 不の内のをともおりての不付といへり
一 多くし見はよそ嫌やのさまて浅猶不嫌
一 山陰樹下し此句にも分き嫌なり

一みなし子に孫乃字不嫌我嫌ふれとも可嫌
といふ也又或説ともありしかれともそれまてを
可嫌ともいへる付るともいへる説も可嫌両説
あそひものにてなとゝいふハ述懐にあらす
一あかいちのけたるなとまてよのね山を
なといふ詞不似合なれとも申よるへきほと
のことのまはりすたれ色もの色多きなく
一ゆふま藤原なとのやうなる詞を付る数や
一大色相内と云さをしゐて是題ても人嫌ハ
かいつく心ゆつきか申也
一みるよむ見ゆるとみたとはまきを二句可嫌

一みるよう見ゆるを二句可嫌と或人説よ
り色里結構ありみゆるをなとゝいふ色さまを
きらふ題りき
一みそらよそちを人のよそひのゝするなり
是を年の字二句嫌する数の上ハ三十
四十なとちとしいはすれそよろや古今の
席ハしれとも一をしと也訳をちとはひ
ても年乃字よきらひを嫌ならねとすとう
ちせいふそうしをつきたれすと人の
ハ色也
一ききつん嫌見　みとの見をしし二句なり

一三字つゝけ　同し両と可讀なりけの字
なとの詞かわりれつ色れなと世わつれり
色ませにとつひり色てそふしたくし思ふ
なとの字をそうれ御法にし讀三字つゝけて
まれなり世用にて名簿なり河のこきれさく
すり不可及さりなりいつとても不叶事也
し

一白木綿　なとのたくせしをしなりくと讀
すりし経とたくせいひくき両と讀なり

一たうふと　たくれらの如も同前と可讀

一たきしまのゐこえす前にれしなりけり

きらふんしほと云も同前

一潮　色てよ潮八十潟れと云てもアハ不可云

一しか　たく一焼一潮一昔都の詞なり塩
うきと藻しほにれ煙もえすくもなとみれやく
塩の同前なり

一塩をしか焼　と焼所なまとしかす也
折関のかやしほうやきと心色もし人偏也

一塩入海　あこならねとものせ心ゆなりし人
のかや海界をは有るし

一しほ手こ路　なといふてそ山数多色
高ませきす始まり

一 盥盆は居所にて二句嫌ふへし
一 清水しみつなとはすへきに二句嫌なり
一 清流とある類はきらふへき水嫌やうと嫌也
いかゝしうありきらふきものいふ詞付句
計にらふや
一 志賀の山越なとは花を結ひくを嫌指
一 思ふれしうれしひ なといふ詞に遠にあり
類と嫌也ゑ用に二句なり懐紙かけ置て
志賀のかの山やつも要むも又あるへしうつせ
ゐのおもへうしと依信く
一 志ぬふのやすさこひしき なと同前老人

一 山類は二句嫌なり
一 志ぬふを主 捷栖にあることを交の恋のふと
云字あるを知りと嫌なり
一 志ぬひ宗 秋や思ひし字にかわと嫌へし
思車 恋にかゝる懸案をね車は 小事 なり
此外義不審となんさゝれけるきこひきら
へしやいふまなるへし
一 思ふは忍の恋人は恋ひうれくありけるく深
とさめうらむのむ大方との數みに同しさ
也下吾かくてくに活を
一 樓のきり數 子としてもう色そのや秋數

すりあくこゝろきこととも釈教にあらすせぬ也
修道発心ハ不斎とき只ニ一字も釈教に
一 雑を加へそのまゝ実意句論秋なり
ともし葉を秋也
一 下草とは秋なといへれも多くハ不可然
下の字のよしあるへし末の句による恋なと
うつへししといふ心也
一 之垂見雑に山に似合も无なくしたく
道あるとなり草木猶心を色てもなく哀儀
一 竹くたりるを同前
一 しをれ聖なといふは二人一雑二句嫌候

一 恋しを也聖なといへとくる色情不可嫌之
一 下荷とへそのまゝ二句嫌木の事也雑と
いふ字のなくてたゝえりしと計をよむ
一 下細 次数なり下の字打状嫌へし
一 康たく一康おすりるに一句せよのとさ
しても雑なり
一 えりとの家らるなとするる一切に
一 近代あれときらふなり
一 あをの葎 色ゝ恋の文色を無まかせ
これまゝとくをある趣りしさ
一 しはまそてしるをのそり喝のそしてを

一 おもへ不らし
一 紫の唐土の戸　なと述懐にあらす歟
にては植物にもあらす
一 志の戸　なとをきて又紫にこふなとく
可去也月なとをも色にきらはぬ懐く
一 紫とる　志てり紅なとも色に隔にあらす
一 志をり　植物にて二句隔へし
一 時雨　秋を去一作く時雨時分と云
をもすり二のうちなり
一 時雨　にて時の字は去てもかくしつるは
志くれと時の雨なと云数不可除者也

一 時雨してなとのやうなるするもいふ
あらぬなしくもまるまをおりと嫌やしても
とまりおりて一作く也や
一 霙は雪に志もさるはなくおりと嫌へし来く
の志れく散のしつをなとも知りされり
わりそ
一 志の　草の数よりかくるは嫌歟うたき草の
ことし作にて又句もいへり
一 志れくめ　に指を二句嫌すれは又時分にては
不嫌之めの字なとも二句はく不可付之
一 時鳥　なとの鳥と云字面顔にも只可為一

一恋しきわひしなとのしに二句嫌也
一衣よそほへし折られや物しなし　これ
せいつれも二句嫌也其外しなれ　なと同
一しなれ　まをくを隔くし可嫌のせい　色々紙
出すへきとしろしや　いもくきらふへき也
一しみくしなれし　なといふ　りそれらし
忍ほしなとも云字同面を不苦云字うの
といふを苦の事也
一むつましきこゝろ　しうなし　折にし好
ほしあり　ふとのたくひのはるなりの也
そしとまりあるすきあし　をしと

まゐりきらふ押のうちを
一さほしめくのことは入あとて大方百韻
に二はのるあるへし
一色たれたとへし　二句嫌へし色はのし
まくてもありせと海辺嫌へし　月にうし
なとのやうなるしりてもとまらせと
いふ也
一ひのふしと　ひうふし　二句さし略也
むのふし　なと　山せをし　かとのしなる
これを切字なりなるなり
一さとまる　又たせまり清濁ふくるてま韻

一 の字は字二句嫌ひにても用ひ来りしなれど
是清濁の差別なく二句嫌なりといふことは
悉くおぼしくおもひて其ままなしすと
も二句きらふべきなり

一 なく候　世言やう色の志もしるこらで
やすからぬ事なれどもむつかしきすみく
いひつかずもんなり

一 人偏　也人偏二句きらふべし

一 十八行切字二句嫌ひなれ共一字の物は皆
かな字を二句嫌なり

一 時分と時分に二句嫌ふは書れ時分入事也
鶏鳴子也鶏時分とも又句嫌ふ多時分又
用下意に注を

急

一 急に吟く楽う色そのまま寸但を定
に依て是書う色しらて携者之に吟く
を春や秋をとっても秋也後に書所有故
に捷携に二句嫌といふ説いつもきもへ携
うしろを

一 あひうめむつかしのうらうりてくろの
さらいろといふなり
ひ

一ひもろき　神祇也ひもろきとは神供なり花
なと手向るをもいふなり
一君と臣　如此出来ば人といふ字有共二句
さらふへし
一他の國にても人と云字有とも二句嫌あり
人倫によりては
一姫　さか姫さよ姫なとは旅述まても折
旅の句にて二句あるへし
一日　ひるひる不嫌之時雨てさへ不苦
一日　かけさ附日夕暮くれ日なと又句嫌也朝
暮く日なとは月ならでは三句さるへし

一盆　七月次の月折越と嫌也　年月隔月
月日なとは猶くる細かに此数當月次といふや
又月数月のいろなとても物よりは三句
嫌なる物より日次は日又同前
一ひなとの日の數の事　くれくれ日きらひ
おれ日くも不はこれをはう外不可勝計
一ひかりの日　まいくうなとは二句きらふ
へし
一日　ひきかふなふいくうなとりうれと
時雨てを若一日二日れも同前
一ひくらし　如此のその百韻有　一まりひ

一　中も晩にも二句嫌と云説不謂付句にハ不苦
絶句之前ハ可然けし
一　ひくらしハ虫にも人にもなるとしては
暮の字にても日の字にても不可嫌之
一　光　月日ハ一　荒雷ハ一　光陰に一　以上
三なるへし
一　ひのきとあるハしても日のあるなり
嫌ふゆへ是も天象に二句嫌なり
一　光陰ハよるひるの又月日と同く昭に
二句嫌なれとも月ハ日にて見てハそ
一　あるなれとも趣ハ寸夜昼同前

一　なれし夜昼一本なれとも是も付句にハ不苦
一　久遠　久の字にても本の字にてもそらりも
常夫なとにても以上二句嫌へし
一　火　火やくくハ焼かくし煙にも火打
と嫌ハぬのけも面を可嫌耳
一　火とハ難に火の数二句嫌へし
一　ひとゝのうらうらねむ炭火にも見えし里
のありつ継可嫌打とは嫌ふ
一　火のつけ見ゆる　子としても好夜者なる
しきたもしの所にても入
一　探題　なとの換様面讀にて只一なるへし

一　一葉　とり桐松付る事悪し初秋なり
さり物と定りける物なれどもより
一　一葉ちるは　多く一葉とこそいひても秋
秋の季也七月十五六日なとまてをいふ也
うつゝんの鐘迄も月の詠なとくつきて
もくろしりゝすせい也り

一　粟の穂　揺なるを揺なりといふ説悪し
一　夜　世計歟秋数よりわたす事なとより
を群数なり一夜をいふ詞さのこあのまし
うつさるゝとしなるを
一　村　居木のむ色て行一むらなとこそあるへし

一　一といふ字　句論両に一所くや綿の数字
を可替物不用之為也にらしうれ数色と
新式にありあるを　假令ひとつ重一松なとい
くら也しく松りとの也へしと云也や
一　揺多く一遍一月松なとゝ一より人偏
也花ひとつまかとのいしく也人偏
一　ひとつ是ひと色とかといふ詞は一文字二
句隔ひとしきと同おなり
一　ひとへきぬ　是いふうり　一文字なる衣也
云字をもよう　二句隔や
一　細　衣裳や夜衣や下ひもとと云ても同おや

一ひれふすしく名類なりひ連始これとく
よめり
一ひらし　折節にしし事也嫌すり漢は下
にし句は居所二句なりいかにも光孤法ず
一ひさ屋にもり書隠也書居所の心によめる
きに只管を鑑や一類よ居所の心ありと云く
一紗窓　りうろうりおもる色しつらひ
よるひを嫌也ひとつひかり冷す故なり赤
ても　ーーり入
一氷室　入り雪面をきらふへしこまても同
也もし雨千載之

一ひろふひなき　なくは生類二句嫌法を
みちにも二句嫌なり他准く
一雛　人形の事なり鳥のむまと云り不
嫌之とり色子和名のえ鳥れひなかとあの
もしはうくなり法れきゝ公すといふ
るり不審なり不許可嫌とすり
一引　よ弓をよしりひ也ぞ述くるべし恵
しー数寄雨よ其類載之
一ひさおもそうし　小田を植ひとそう色
そのり二句嫌可しれ雨とくれのされ一座
に一なり他准く

一ひやくうは蕭秋なりは何ゝめるといへり
時くれしとまれ心のみ要なるに
も
一ちくさきみもし清むかなりなれやもは
あり来遠るに紅清てうしとなり濁てそくる
しつらは
一き流あし　もさてのこ國文可之紀録く
一紅葉　たく一梅梅なとくり一葉の紅葉一
とみちの橋をいふなるへきふこれ新式の
詞なるもるんち三とものおり流うゆるなり
も葉ちのはしを此外なれも天河のこと哉

一ゆゑは秋の季不同之故とあれとおくと可替
紅葉の橋　の鵲の橋のはしは星の紅と橋
て紅葉と渡すゆゑに紅の名とよまてりふ
とはるに渡不可用之古今集なりあまの川
紅葉をはしに渡をしや七夕つめの秋と
読らんとよめるによりてきれちれはしといふ
なりとよみ先は和語やうしゆゑは此言を紅葉
鵲はにはすてうせとやゆやうこそのひくの色れ
詞なるを近来たくにいはすて後をとの紅
葉のはしといふをみくあるやうにまめつ
をみしとはかり母子とくいふ本文

かれも海やうもしやうも嫌をへしう色也
に二句さらふへしといへ色にて多くし嫌ふ
のうち一切りうへものに寄をきらふ
色なりとすり
一 みどり に色二句さらし色やうも松の色霜は
冬かうし不可嫌之但可依句すり
一 紅葉 地よりてうれ打ふ本は紫一紫なと
みなる色りうを
一 みどり は山は色なと同刻りと嫌趣しや
い色星たさし山のいろ理れいろ葉れいろ
おに西と嫌へきかり

一 紅葉 ありことのもて二句嫌なることもとと
いひてそ不嫌之ことのもて有る歟をみ句嫌
はもしま安裁之
一 森 とく一ゑ紫に一ふる色しておいとく
みそを多くすなとまりてよしとりて
たくもは悪し
一 最上河 うれおまもくされなといふの
かるとゑるに二句嫌なり上の字濁すり
一 もしか草 植物なり手通の事ありいひ
なしらんを植物となるましきり
一 もくれ 葉に二句嫌色しも夜打物なり

也ヾ證を句語懸物の挂物に可為二句う
一 ことの葉くれし人 旅や秋やたりうなと
してを夜や時らも恋みくといひて可為名
一 百千鳥 に鶯不苦といひもたれとも也てた
うるへかすり百千鳥鶴になとしたく春の
百千の鳥の時分つりなりうくひをまつたか
らんむいは色りたくしうくひをお嫌し
くるゆあり也は色也
一 武士 者よる人倫なり
一 ものゝふ これをとりとはいひくを二句嫌云
のを余不苦と云説ある遍し 同二句なり

一 櫓の称とせはするまたんと事ゆるといひへて
侍るとやきそのすり不櫓ふ治色を
一 もなくけ ひり暮うりしてを意す捨なり
一 その思ひ 櫓の字ぶ字ゆきらふ二句嫌や
襟の字ふれとなりいつれも二句のそのし
り色字ありふ由色なを嫌くと思ふ也とをし
入りを持すりもとぶゆも又句嫌なり
一 をめくみ として万櫓の名なりたと色をた
くれ夕くれ なとのときまたの詞のるなり
何毎夕暮のすれくれといふ翻おすーそく
なりといふ事する一句各ものるすり

かくまうしさうらふ抑此字と新式はきをみまもり
たまうとのみすりこまてもおなしき事也
不嫌之作法ふれたまなさてかなしし下名ハ
云ふなりしもことをよりすあまり付きさふらふ
趣しいつれも連歌名歌のあるへきなり
一 をも不嫌之作法にて
一 それをなくと定候事二あてをかり
縦令此物と定ていはる事嫌也二
一 ともなき 又とを云詞一座に二計也 作法
一 文字のあり 一座に二句あるとを云事不謂
只二句あるへしたゝし世間の文字分ハ

ゆめゆめ不可仕分をあれて名所しれ
もくなさいふ新式のいうほとも不苦
一 文字よ菓子ふらふすり
一 それし 類り越上句下句とのし 一
已上二十ヶ条
世
一 園 只一名所一懐紙一表状をとしるなと云
上一座又番状なとの名をり可然云々あまり
新式の詞やたよりきん毎くまえか一名所十一
然而事先法をとしるかとの名をり 一ヶ所
於人しやりんへ可然之以上云や

一世中や　世中の居所振も近くゆるとある
発句なとは以外は居所ゟ二句嫌也
一圓は字にて辨をまゝとせくとも嫌也世
きれ字や世くとりし詞百韻に一や
一浅茅生に紛の也ゟとつゞて又文字なく
付たる事無し　能候
一迫責二んとも字も各別なり不可嫌之如此成
詞以外きも可憚之
一蝉たく一日くらしせむなりと嫌なり蝉を
もかさをかなれやもてす須包て後をかさ
珠不ゆる也以返王

一せん　と云詞也すると云詞也とも紙あひさ
二句去ゝ物也能候く
一す
一住吉社神は名不成る木包すりて除くと
なとい名を名所にあしすにおかりも付之
一まるゝの海なそに國の名二句嫌有名
所ハるこかんなる名にも不まても二句嫌
一しあふえのうるみ伊勢の海なといふれを
一松の　一不こり治之
一末の松山　名所や捨ゝのすり末は松とも
よみる末の松といひても山類なり

一 秋ときて也此秋ハあかハしときの字扨
題りわかす縁語し
一 ちけ 水辺りあかす
一 ちゑのとさ ちかてゐなとの類同かやう也
そのゆゑもかうを
一 落た 一尾花一もくろかやなとハゐく
以上也や
一 すゝき これもれおかり諸嫌也し
一 すゝき 草の類なれハ行くあらひやう落さ
としかたもしれ雨中へ
一 ちゑの雅 ホ二句嫌やとまちそや引用す

一 すゝ聖山類へ めらくれ
一 栖 居所ホ二句嫌うる但とも云字ハも二句
嵐とりふ字ハ又句や
一 すゑの 一ハ懐紙の内中も不苦同様すへ
きまりとて云読遍し
一 すゑの新垣 たとへハひて居所五又句嫌
なかゑ東山京の内に行てたとへハひて不居所ニ
二句たてとも居所二句の間ぬ山あく去き
きまハ不入の旧入にてとみれ又句嫌や
一 ちとま丼ハ同居所ようらあしときらふなり
一 住ハ字ホそ又句嫌先

一　ちむ　君来てあふとさりなりし所難あり
きぬはしまをかけ事あるもいゑらし
其なまゑ見ゑてみすゑともわかましれる
やもやまて玉なまとか也も不可有之
一　絵空いふ句ふ出て後まゑしむしあり
すくもし付色つるを躰に松風糸は糾角よ
藤なとそうし松は糸蓑よつのなと絵の用
付なる雨も山用付指合ほとくありもきらふ
ゆ色ふ可ゑは入
一　基といふ字色て眉を見えよへし
一　涼　ふ冷又冷はきなと何まとを二句きらふ也

はあろ五こそ数之
一　涼　もとなて夏をのしふとのすくしき
稀なりとう色てえう也へし
一　すしえき　夜秋よ二ゑきて物のきよえる
とすしやいふ詞て可き維有絃の事や
と古人そいゐろ無用といふ事也
一　そさ用しき　ありかふしむひやくう
ふとの歎二句きらふ也此の詞作まり
も一体くあり
一　淡　山数ありあしもよ見とやくなくしも山
数のを見うなとをかくあまし山数也く之しき

一 下臺に従之

一 て濁る時 に案のゆゑなり人は字
去乃字なしの嫌ひ事もし入
一 捨の字 又句意也 同前不苦方をて濁るは
世をもて濁る事もの君や祈禱嫌也
一 をたれくは捨乃字二句ならふへし
一 海のをらんくつせつしん なきとのをらん
上は濁くすましたれを三のれにわられ
たくらんはのまなり依准く
一 て世をいつれも濁れて二句嫌なるまじく
は許数あるしゆゑ

一 例 てり云孫面とを嫌也是数逢乃君不審を
堪能乃人々しあるをれてさらにい仍て欲く
君孫さしはるかなまて今治之す
一 ちく歌く てり海さる二句さしく嫌すりれ
なし字なれやすもんさ 承りれをいつれをれ
らそされやすもあれい文字も捨すし字らく
ろもおすしたころあれてよこりてしれとも
手らふなり依准く

昌平坂學問所
文政癸未
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan